福島県男女共生センター平成24･25年度自主研究

福島県の高校生のジェンダー環境に関する調査

平成24･25年度にかけて県内の高校生及び教員を対象に実施した「福島県の高校生のジェンダー環境に関する調査」の結果について、概要を報告します。

調査の目的

この調査は平成12、19年度と過去2回行いましたが、前回調査から5年が経過し、学校や家庭における本県の高校生を取り巻く環境や男女共同参画に関する意識がどのように変化したのか、これまでの調査結果と比較するため前回と同様に以下の4つの視点で目的を設定し、アンケート調査を行いました。

1. 高校生や教員の目に学校、家庭、社会等における男女の地位がどのように映っているのか。
2. 学校や家庭において、女子と男子では扱われ方に違いはあるのか、または教員や保護者の接し方に違いはあるのか。
3. 高校生及び教員の男女についての考え方がどのようなものか。
4. 既存のもしくは予想される男女共同参画プランや考えられる施策にどのような反応を示すのか。

調査の方法

対象高校は前回と同様に設定し、質問項目は下記の質問を追加して調査しました。平成25年1月に各学校の協力のもと、教員と生徒に配布して同年3月までに回収が完了しました。
今回の調査票に新たに追加した項目は次のとおりです。

- ●教員用質問2−7 ……「女子の進路について理工系を選択することを積極的に指導していない。」
- ●教員用質問8−9、10 ……「デートDV」「ワーク･ライフ･バランス」
- ●生徒用質問【女子用】3−12……「進路指導のときに、理工系を選択するより文化系にした方がよいと言われた」
- ●生徒用質問14−6、7 ……「デートDV」「ワーク･ライフ･バランス」

配布数：生徒用4335部、教員用756部　回収数：生徒用4281部、教員用717部　回収率：生徒用99%、教員用95%

▶ 生徒の基本属性

	度数(%)
女　子	2,281(53.3)
男　子	1,998(46.7)
無回答	2(0)

	度数(%)
1年生	2,023(47.3)
2年生	1,703(39.8)
3年生	542(12.7)
無回答	13(0.3)

	度数(%)
県　北	798(18.6)
県　中	896(20.9)
県　南	349(8.2)
会　津	1,057(24.7)
相　双	409(9.6)
いわき	772(18.0)
無回答	0(0)

▶ 教員の基本属性

	度数(%)
女　性	305(42.5)
男　性	412(57.5)
無回答	0(0)

	度数(%)
県　北	136(19.0)
県　中	139(19.4)
県　南	50(7.0)
会　津	171(23.8)
相　双	84(11.7)
いわき	137(19.1)
無回答	0(0)

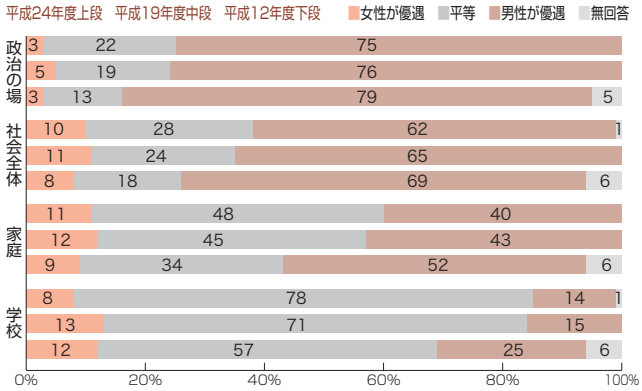
	度数(%)	(女性, 男性, 無回答)
家　庭	32(4.5)	(32, 0, 0)
外国語	99(13.8)	(45, 54, 0)
国　語	92(12.8)	(53, 39, 0)
社　会	80(11.2)	(21, 59, 0)
商　業	40(5.6)	(13, 27, 0)
数　学	107(14.9)	(25, 82, 0)
保健体育	51(7.1)	(12, 39, 0)
理　科	86(12.0)	(32, 54, 0)
その他	94(13.1)	(46, 48, 0)
無回答	36(5.0)	(26, 10, 0)

※四捨五入により、割合の合計が100%にならないことがあります。

1 高校生や教員の目に学校、家庭、社会等における女と男の地位がどのように映っているのか

教員 ▶家庭や社会などにおける男女の地位

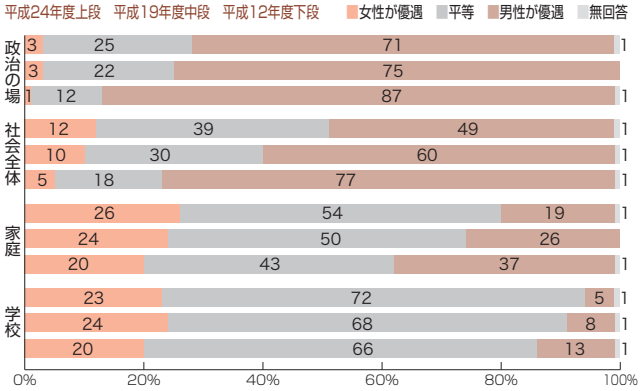
前回と比較し、各項目とも「女性が優遇」「男性が優遇」の割合が減り、「平等」の割合が増えたが、政治の場や社会全体では「男性が優遇」と評価した割合が6割以上と依然として多い結果だった。



生徒▶学校や社会などにおける男女の地位

前回と比較すると、各項目とも「平等」の割合が増え、「男性が優遇」の割合が減った。「女性が優遇」はあまり変化が見られなかった。家庭と学校については「女性が優遇」と評価した割合が「男性が優遇」と評価した割合を上回っている。

社会全体では「平等」が9ポイント増「男性が優遇」が11ポイント減となったが、依然としてまだ、5割が「男性が優遇されている」と答えている。



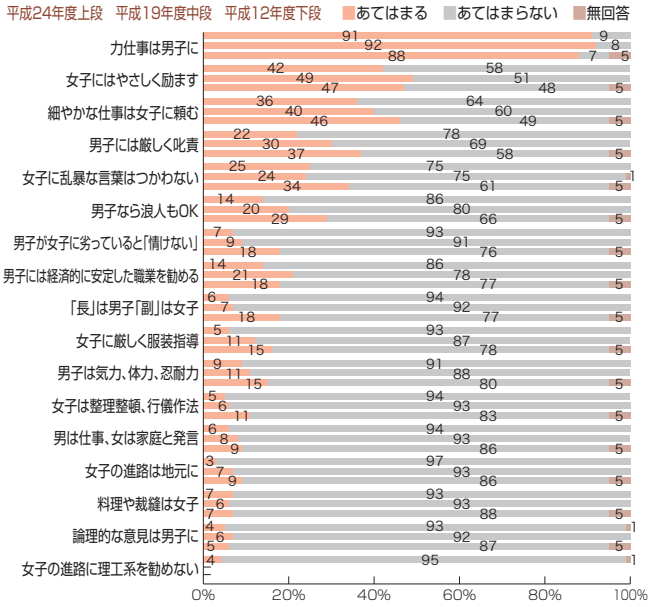
2 学校や家庭において、女子と男子では扱われ方に違いはあるのか、または教員や保護者の接し方に違いはあるのか

(1) 学校

教員▶生徒の性別によって区別した扱い－どの程度肯定しているのか

前回と比較して、「女子には乱暴な言葉をつかわない」以外の全ての項目で、「当てはまる」が減り、「当てはまらない」が増えている。

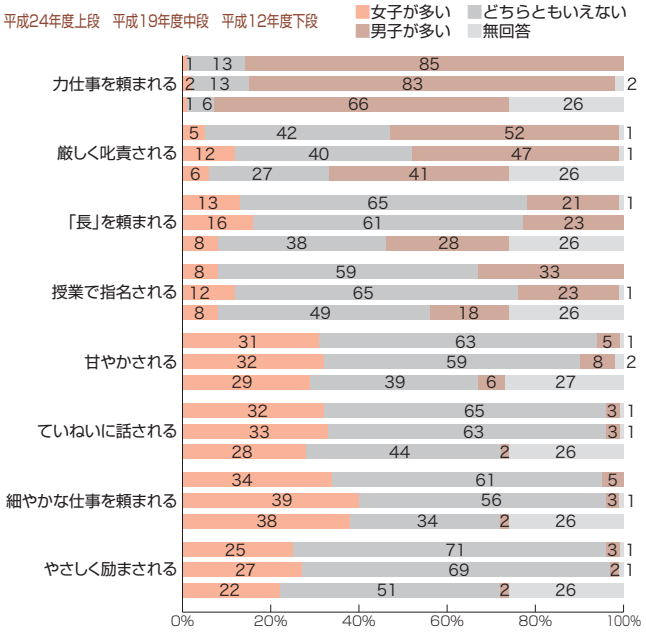
特に変化があったのは、「男子には厳しく叱責」は「あてはまる」が8ポイント減り、「男子には経済的に安定した職業を勧める」も「あてはまる」が9ポイント減った。



生徒▶学校における生徒の性別による扱われ方の違い

男子：「力仕事を頼まれる」「厳しく叱責される」について前回よりも若干増加している。また、特に「授業で指名される」が10ポイント増加し、約3割となった。

女子：すべての項目で割合が減少しているが、「細やかな仕事を頼まれる」「甘やかされる」「ていねいな言葉で話し掛けられる」は約3割で、前回とほぼ同じ割合だった。

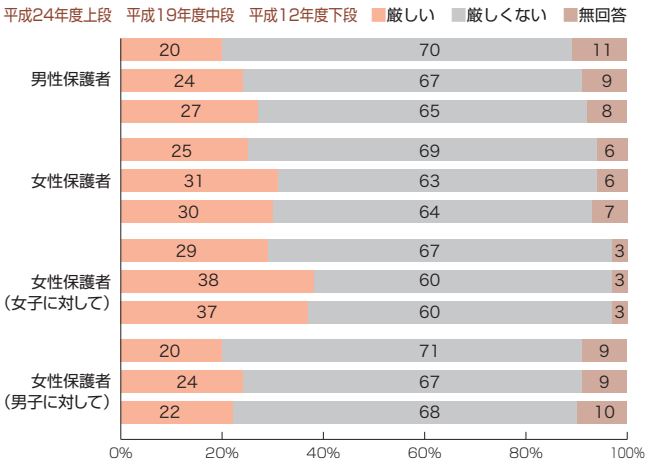


(2) 家庭

生徒▶保護者から「女らしさ」「男らしさ」についてどの程度厳しくしつけられたか

全体的に「厳しい」の割合が減り、「厳しくない」の割合が増加した。

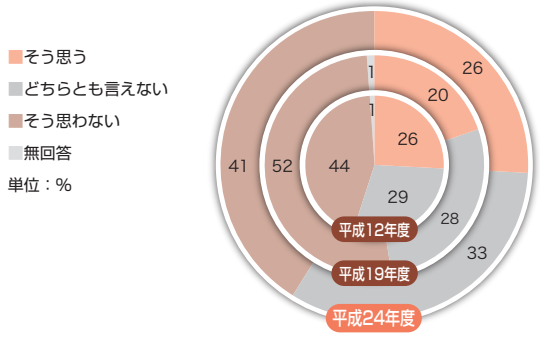
しかしながら、女子生徒が女性保護者から厳しくされているとする割合が約3割なのに対し、男子生徒は2割となっており、前回同様に女子生徒の方が「厳しい」と感じているようだ。



3 高校生や教員の男女についての考え方がどのようなものなのか

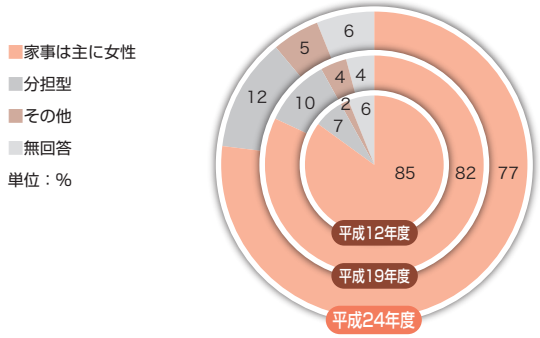
教員 ▶男女の区別と差別

「男女を性別によって区別することは差別につながる」について「そう思わない」と回答した教員が前回より減少して4割となり、「そう思う」と回答した教員が26%に増加した。



生徒 ▶保護者の性別役割分業パターン

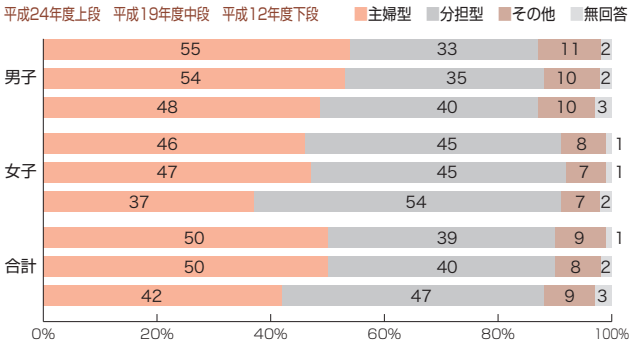
生徒は、7割強の家庭で主に女性が家事責任を担っていると認識しているが、前回より5ポイント減少し、過去最低となった。分担型は2ポイント増加し12%となったが、依然として、「家事は主に女性」が担っている現状は大きく変わっていない。



生徒 ▶生徒が理想とする夫婦の役割分担パターン

全体では、主に家事責任を女性が担う「主婦型」を理想とした者が5割、家事を夫婦で分担する「分担型」を理想とした者が4割と前回同様の結果となった。

男女別では前回と同様、女子の方が「分担型」を理想とした割合が高かったが、前回と変わらず、前々回と比較すると大きく減っている。

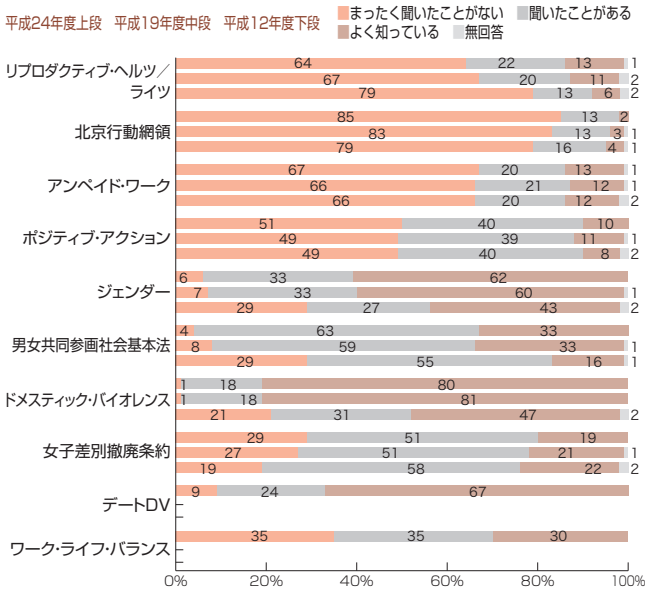


4 既存のもしくは予想される男女共同参画プランや考えられる施策にどのような反応を示すのか

教員 ▶男女共同参画に関する用語の既知度

すべての項目について、前回と比較して大きな差はみられなかった。

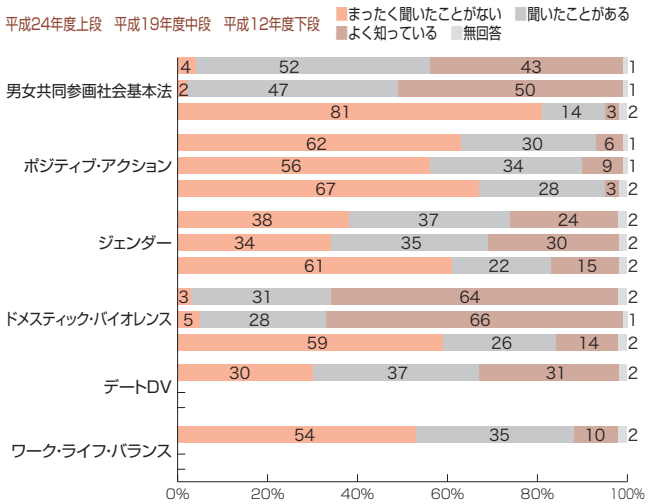
今回「デートDV」と「ワーク・ライフ・バランス」について、初めて調査を行った。「デートDV」は約1割の教員が「まったく聞いたことがない」と回答した。「ワーク・ライフ・バランス」は、約3割強の教員が「まったく聞いたことがない」と回答した。



生徒 ▶男女共同参画に関する用語の既知度

「ドメスティック・バイオレンス」以外の用語に関して、「まったく聞いたことがない」が若干増えた結果となった。

全体的に前回と同じような割合となった。教員同様に今回初めて「デートDV」「ワーク・ライフ・バランス」について調査を行ったが、「ワーク・ライフ・バランス」について「まったく聞いたことがない」と回答した割合が半数以上だった。



まとめ 教員について

前回と比較すると、「学校」「家庭」「政治の場」「社会全体」の各項目において平等であると評価した割合が増えたが、「政治の場」「社会全体」については、「男性が優遇」と評価した割合が約7割で、これらの項目についてはまだまだ男女格差があると考えていることがうかがえる。

男女を区別した扱いをした経験については、前回と比較すると大部分の項目で「あてはまる」とした回答の割合は減り、「あてはまらない」が増えた。また、「男女を性別によって区別することが差別につながる」に対して「思わない」と回答した教員の割合は前回よりも11ポイント減ったが、未だ4割の教員が、男女を性別によって区別することは差別につながらないという回答だった。

男女共同参画に関する用語に関しては、前回と比較して大きな変化はみられなかった。今回初めて調査を行った「デートDV」は約7割の教員が「よく知っている」と回答しており、高校生が当事者になることもあるため関心が高いと思われる。また、同じく初めて調査を行った「ワーク・ライフ・バランス」は、「よく知っている」「聞いたことがある」と回答した割合が65%だった。

まとめ 生徒について

教員同様に「政治の場」「社会全体」「家庭」「学校」の全項目で前回よりも「平等」と回答した割合が増えた。特に「社会全体」については、「男性が優遇」と回答した割合が、11ポイント減り、49%と大きく変化した。しかし、7割以上の生徒が「政治の場」では男性が優遇されていると認識していた。

次に、学校における生徒の性別による扱われ方の違いに関して、すべての項目で「どちらともいえない」と回答する生徒が増えた。

家庭内においては、前回同様に約8割の生徒が家事は主に女性が担っていると認識していた。また、理想とする夫婦の役割分担パターンは、平成12年度調査では「分担型」が最も多かったが、平成19年度調査では、「主婦型」が「分担型」を上回り、今回も前回同様男子・女子ともに「主婦型」が一番多かった。

男女共同参画に関する施策への関心度、用語の既知度については、教員と同様にほとんどの項目で「よく知っている」と回答した割合が減っていた。また、新たに調査した「デートDV」は、生徒の3割が「よく知っている」と回答した。「ワーク・ライフ・バランス」については、「まったく聞いたことがない」と回答した割合が5割を超えていた。

平成12、19、24年度と調査を3回実施した結果、家庭や社会における男女の地位について、男女は平等であると考えている教員及び生徒の割合は、平成24年度調査が最も多く、調査を重ねるごとに増加している。しかし、項目別にみると、「政治の場」「社会全体」では「男性が優遇」と回答した教員及び生徒が半分以上であり、その割合は、平成12年度から大きく変化したとはいえない。また、家庭内の家事の分担割合は、平成12年度から大きく変わっておらず、引き続き家事や育児の多くを女性が担っていることがわかった。

これらのことから、男女平等意識は除々に浸透し、また、男女共同参画に関する用語の既知度の割合が高くなってきていることから、男女共同参画社会についての関心は徐々に高まってきているともいえる。しかし、現実の社会や家庭生活においては、固定的な性別役割分業が依然として根強く残っていることがわかる。

今後も継続して、男女共同参画社会づくりの担い手となる生徒たちが、男女平等に関する意識をより高く持てるように、様々な情報を提供するとともに、男女共同参画社会を推進する社会環境・教育環境を整えていくことが必要である。

今回参考調査として、男女共学校と女子校で、男女共同参画意識について差が見られるのかどうか等を把握するため、同様のアンケート調査を私立女子高校にも御協力いただき、実施しました。その調査結果も含め、詳しくは報告書をご覧ください。

今回の調査に御協力いただいた関係校の教員・生徒の皆様に対し、感謝申し上げます。